

レストランではないけれど ～わたしのニュー・クリスマス～

作 : 岡崎道成

演出 : 小川政弘

★登場人物

佐々木美香・・・高校1年生。

美香の母

小学6年の美香(回想)

洋(回想)

若葉あゆみ・・・美香のクラスメイト。クリスチャン

DJ1・・・若い女性タレント

DJ2・・・ラジオ牧師

中川・・・美香のクラスメイト

沢田・・・美香のクラスメイト

教会の女性

高校科の先生

<前編>

○美香の自宅のダイニング

美香 「いただきます。」

母 「美香、お父さんがね、今年はクリスマスに休みとって帰ってくるって言うんだけど。」

美香 「クリスマス？じゃあ、お正月は帰ってこないってこと？」

母 「うん、どうしても年明けから仕事なんだって。だから、お母さんもクリスマスに休みもらおうかと思ってるんだけど。」

美香 「・・・何で？」

母 「何でって、ここ何年も家族でクリスマスなんてやってないし、たまにはレストランにでも行って、家族水入らずで過ごさない？」

美香 「えー、いいよ、そんなに私に気を遣わなくても。」

母 「気を遣うだなんて、お母さんはね、ただ・・・」

美香 「お母さん、私もう高校生なんだから、いつまでも親と一緒に喜ぶ年齢じゃないの。デパートはクリスマスが一番の稼ぎ時でしょ。いいよ、無理しなくて。・・・ごちそうさ

ま。」

母 「あ、美香、ちょっと！」

モノ(美香)「ひゃー、危ない危ない。」

N 私は、夕食もそこそこに自分の部屋に逃げ込んだ。私、佐々木美香。青春高校1年生。私の両親は、共働きだ。父は建設会社の課長で、去年から単身赴任してる。いつも週末には帰ってくるんだけど、それだって仕事が忙しいときには帰れないこともしょっちゅう。母は駅前のデパートに勤めている。私は、小学生のときからいわゆる鍵っ子だった。クリスマスのお祝いなんて、ここ何年もいつも一人。でも、今年はちょっと違う。同じクラスの中川君から、映画に誘われたのだ。バスケット部のレギュラーで、ユーモアもある中川君は、女の子の間でも結構人気が高い。その中川君に私が誘われるなんて、初めは信じられなかった。男の子と2人でクリスマスなんて初めてだから、ちょっぴり大人になった気分。でも、母にばれたりしたら許してくれないに決まってる。そういう事はやたらうるさいんだから。普段は放つたらかしのくせに、親なんて勝手なものだ。そう、あの時だって…。あれは、小学校6年生の時だった。

—回想。

健太 「美香ちゃん、小百合ちゃんちでやるクリスマス会に行かないの。」

美香 「うん。今日、お父さんとお母さんと、レストランに行くんだ。健太君は。」

健太 「僕も、お父さんがケーキ買って早く帰ってくるから。」

美香 「クリスマスって、みんな早く帰れて、うれしいね。」

健太 「うん。じゃあね。」

美香 「バイバイ。…ただ今ー！」

母 「あ、美香、待ってたのよ。ごめん。さっきデパートから電話があって、町田さんの子供が熱出しちゃったんだって。お母さん、代わりにこれからお店に行かなくちゃならないの。」

美香 「えー。じゃあお父さんと二人だけ？」

母 「それがね、お父さんもお仕事長引いちゃって、帰って来れないんだって。その代わりに、美香の好きなピザさっき頼んだから。あと、これケーキ。ほんとに、ごめんね。じゃ、行って来るから。」

N 一人で食べたピザもケーキも、味なんかわからなかった。何がその代わりよ。こんなの、代わりになんかならない。こんなの、クリスマスじゃない。…でも、もう家族と過ごすクリスマスなんて、卒業するんだ。今年こそ、本当のクリスマスをするんだ。

○美香の自室

DJ1 「えー、次のFAXは、川崎市のラジオネーム『なっちゃん』からです。どうもありがとう。えーと、『亜紀ちゃん、聞いて聞いて。』ざーんねん、FAXだから聞こえないもーん。そうじゃないって。えー、『ずーと片思いだった彼に、とうとう告白しちゃいました。だって、早くしないとクリスマスになっちゃうでしょ。そしたら、じゃーん、彼もあたしのこと好きだったんだって。もう、夢みたい。イブに二人で、コンサートに行く約束をしました。とうとう今年はあたしにも、本当のクリスマスがやってきそう。』おめでとー！いやー、今年は『なっちゃん』にもクリスマスが来ますか。そうよねえ、やっぱりクリスマスは好きな人と一緒に過ごさなくちゃね。うらやましいなー。私なんか、今年もラジオのお仕事が入っていて…」

DJ2 「…ですから私たちは、イエス様のご誕生を本当に自分の喜びとすることができるんですね。イエス様がお生まれになったその日、羊飼いたちは、天使がこう言うのを聞きました。『今日、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ、主キリストです。』…『あなたがたのために』、そう、イエス様が生まれたのは、私のため、そして他でもない、あなたのためなんですね。そのことを知ったときに、あなたも、本当のクリスマスをお祝いする事ができるんです。」

モノ 「ふーん、『本当のクリスマス』にも、いろいろあるのね。」

N 考えてみたら、クリスチャンでもない私たちがクリスマスを祝うのもちょっと変かな。でも今の私には、さっきのFAXの女の子の気持ちの方がぴったり来る。イエス・キリストがどんなに偉い人か知らないけど、どう考えたって私とは関係ないもの。

美香 (モノ)「さっきのラジオの人、キリストが自分のために生まれたなんて、本気で信じてるのかな。」

N 話の内容は突拍子もなかったけど、ただ、真面目に、熱心に話していたその声だけは、まだ耳に残っていた。

○朝の駅

駅アナ 「電車、ドアが閉まります。ご注意ください。」

美香 「うわっつと。ひゃー、間に合ったー。」

車内アナ 「駆け込み乗車は大変危険ですので、次の電車を御利用下さい。」

モノ 「もう。次の電車じゃ遅刻なんだから。」

N 首から突っ込むように電車に乗ったのでさすがに決まりが悪い。誰も見てないのに、私は満員電車の中を隣の車両へ移動した。

モノ 「あれ？中川君と沢田君だ。」

N 話しかけようと思ったけど、混んでもう一人分が近づけない。中川君たちも、私には気付かないようだ、2人の話し声が聞こえた。

沢田 「それでお前、佐々木と映画に行くことにしたの。」

中川 「ああ。佐々木って、なかなかかわいいし。」

N 私のこと話してる。ちょっとくすぐったかった。

沢田 「でもさ、若葉もお前の誘い断るなんて、やるじゃん。誰かつき合ってるのがいるんじゃないの。」

中川 「いや、家の人とどっか行くなって言ってたけどな。またいつかチャンスはあるさ。」

N 私はとっさに後ろを向いた。

モノ 「若葉って、同じクラスの若葉あゆみのこと・・・？」

N 若葉あゆみは、もの静かで素直な感じの女の子だった。

モノ 「私、若葉さんの代わりだったの？」

N 昨日まではしゃいでいた自分が急に恥ずかしくなって、私は満員電車の中で小さく固まっていた。

<後編>

モノ 「私、若葉さんの代わりだったんだ・・・」

N 私、佐々木美香。青春高校1年生。同じクラスで、女子にも人気がある中川君からクリスマスに映画に誘われて、ちょっぴり浮かれていた。だけど、本当は中川君が誘ったのは若葉あゆみだったのだ。若葉さんは物静かで素直な感じの、私と

は違うタイプの女の子。

モノ 「でも、若葉さんならわかる。中川君が私を誘うなんてやっぱり変よね。」

N そうは思ってみても、人の代わりにされたという屈辱感のような気持ちは、なかなか収まらなかった。

○自宅、ダイニング

母 「美香、タベの話だけどね、..美香？」

美香 「..え？何、お母さん。」

母 「タベの話。クリスマスのこと。お母さん、やっぱりお休みもらったから。」

美香 「え？..だって、私、いいって言ったじゃない。」

母 「でもね、せっかくお父さんも帰って来るんだし。お父さん、今年はクリスマスを家族で過ごせるって、楽しみにしてるみたいなのよ。赤坂のレストラン予約しとくから。ね、いいでしょ。別に、予定あるわけじゃないでしょ。」

美香 「何よ、勝手なことばかり言って！」

母 「美香..」

美香 「お父さんもお母さんも、都合のいいことばかり言って、人の気も知らないで..何が家族よ！何が楽しみにしてるよ！今頃になってそんなこと言ったって。私だって、..私だって、クリスマス一緒に過ごす人くらいいるんだから！」

母 「美香！」

N 小さい頃母がクリスマスに仕事に行ってしまった思い出と中川君のことが重なって、すっかり頭に血が上った私は、上着も着ないで外に飛び出した。冬の寒空の下をしばらく歩いていると、だんだん気分も落ち着いてきた。ふと、電柱にかけてあるポスターが目に入った。どうやら、キリスト教会の案内板らしい。

美香 「クリスマス特別集会..『あなたのために生まれたキリスト』。この間、ラジオで言っていたのと同じだ..」

DJ2(回想)「イエス様が生まれたのは、私のため、そして他でもない、あなたのためなんです。そのことを知ったときに、あなたも、本当のクリスマスをお祝いする事ができます。」

N ポスターの地図を見ると、隣駅から歩いてすぐのところだった。日曜日に、高校生の

集まりもあるみたいだ。教会なら、今までとは違うクリスマスに出会えるかもしれない。振り回されてばかりのクリスマスにちょっと嫌気が差してしていた私は、次の日曜日、思い切ってその教会に行ってみた。

○教会の玄関

美香 「あの一、こんにちは。私、初めて来たんですけど・・・」
女性 「あら、そう。よく来て下さったわね。・・・学生さん？」
美香 「ええ、高校1年です。」
女性 「それじゃちょうどよかった。これから高校生会が始まる場所なの。ちょっとお待ち下さいね。」

N そう言ってその女性が奥から連れてきた人を見て、私はドキンとした。

美香 「若葉さん！」
あゆみ 「佐々木さん?!」
女性 「あら、あゆみちゃんのお知り合いだったの？」
あゆみ 「ええ、高校で同じクラスなんです。」

N 何か巡り合わせのようなものを感じながら、私は若葉さんに案内されて、高校生会の部屋に入って行った。意外なほど飾り気のない部屋の中に、先生らしい男の人と、高校生が数人いた。そこで私は、あの時ラジオで聞いたのと同じ話、そう、世界で最初のクリスマスの話を聞いた。

先生 「・・・御使いはこう言った。『きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼い葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。』」羊飼いたちは、生まれたばかりのイエス様に会いに、すぐにベツレヘムへ向かった。そして、御使いの言葉通り、飼い葉おけに寝ておられるイエス様を見つけたんだ。羊飼いたちは、この赤ん坊が、ずっと待ち望んでいた救い主だとわかって、どんなに喜んだことだろうね。彼らは、神様がこのイエス様を通して、人々を救う働きをなさることを信じた。そして、神を誉め称えながら帰って行ったんだ。・・・今の僕たちは、イエス様がどんなふうにして救い主としての働きをしたか、聖書を通して知ることができる。やがてイエス様は、僕たちの代わりに、十字架にかかれたんだね。」

モノ 「代わり・・・？」

先生 「イエス様は、神様に背を向けて生きている僕たちの罪を全部背負って、十字架にかかって下さった。もしイエス様がいなかったら、僕たちはまだ、神様を知らないまま、罪の中を歩んでいたはずなんだよね。今、世の中では多くの人がクリスマスを祝うけど、イエス様と自分の関係を、この時期、もう一度考えてみて欲しい。イエス様が生まれたことを、僕たちもあの羊飼いたちのように喜べたら、本当に素晴らしいよね。」

N 私は、その先生の話に興味深く聞いていた。人の代わりに十字架にかかるなんて、キリストもずいぶん災難だ。私が若葉さんの代わりにされたのとはわけが違う。

モノ 「飼葉おけに寝ていたかわいい赤ちゃんが、どうしてそんなことになっちゃったんだろう。」

N 二千年も昔にこの世に生まれた、一人の人に思いを馳せている自分が、不思議だった。家族で行くレストラン、憧れの男の子とのデート。楽しくてウキウキするのがクリスマスだと思っていた私。そして、そうならなかったのに苛立っていた私。でも、この人たちは違う。クリスマスを、イエス・キリストのことをもっと真剣に考えてる。こんなクリスマスが、あったんだ。

○教会玄関

あゆみ 「美香ちゃん、って呼んでいい？ 駅まで一緒に行こうか。」

N 教会が終わると、若葉さんはそう言った。名前で呼んでくれたのがうれしかった。

あゆみ 「どうだった、初めての教会。」

美香 「うん。いろいろ考えさせられた。キリストのこと、もっと知りたいなって思った。」

あゆみ 「そう、うれしいな。」

美香 「うれしいって、私がキリストに興味を持ったこと？」

あゆみ 「うん。」

N まるで恋人でも紹介しているみたいに、若葉さんはそう言って笑った。

あゆみ 「ね、美香ちゃん、クリスマスの夜にも特別集会があるの。来てみたら。イエス様のこと、もっとよくわかると思うよ。じゃ、私こっちの電車だから。また明日学校でね。」

美香 「さよなら。ありがとう。」
モノ 「クリスマスの晩か…あ、そっか。だからあゆみちゃん、中川君の誘いを断ったんだ。」

N そうだ。私も両親を誘って、一緒に教会に来よう。中川君にも正直に話して誘ってみよう。断られたら…その時は、いいじゃない。そうだよ。レストランでなくていい。男の子とデートでなくてもいい。今私が掴みかけている何かを、両親と一緒に聞いてみよう。本当のクリスマスをあそこで探してみよう。そう思ったら、何だか急に母の顔を見たくなくて、私は駅の階段を駆け上がっていた。

<完>
